

# 横穴式石室の築造技法からみた 百済と湖南地方

## 熊津期百済と栄山江流域の造墓集団

Baekje and Honam Seen from the Perspective of Construction Techniques of  
Corridor-Type Stone Chambers: Tomb Groups of the Ungjin Period Baekje  
and Yeongsan River Basin

山本孝文

YAMAMOTO Takafumi

はじめに

- ①地域間交渉を表す資料としての横穴式石室
- ②築造技法から見た百済の横穴式石室と「王畿系集団」
- ③地域間交渉の視点からみた横穴式石室の系譜

結論と展望

### 【論文要旨】

本稿では、横穴式石室を素材として、韓半島三国時代の百済と湖南地方（栄山江流域を中心とした全羅道地方）の諸集団との関係の一端を提示する。特に両地域の横穴式石室の築造技術に観察される共通点と相違点（技術系譜の差）をもとに、造墓行為の系統や工人の動向について推論することを目指した。5世紀後半から6世紀前半までの湖南地方の古墳は多様化の様相を見せ、方台形、円形、前方後円形など様々な形態の墳丘内に甕棺や堅穴式石槨、横穴式石室など多様な埋葬施設が造られた。この時期は馬韓系の墓制（周溝墓）の展開期と、泗泚期百済の規格化された横穴式石室の拡散期の間の過渡期的時期にあっており、土着系の墓制が百済系墓制に変わっていく段階に多様な地域の文化的影響が当地に及んだことがうかがえる。この時期の墓制の一つに、百済の影響を受けたとされる横穴式石室が含まれる。この時期の百済地域の中心勢力に関わると考えられる横穴式石室の構築技法を観察すると、石材の加工・使用法、構築の工程、空間設定と石材の使用数の間に相関性が見られ、異なる古墳群間で構築技術およびそれを保有していた集団の系譜を割り出すことができる。この共通の技術を保有する造墓集団を仮に「王畿系集団」とし、同様の技法で造られた石室の分布からその活動範囲を想定した。この王畿系集団の技術で築造された横穴式石室と湖南地方の石室を比較すると、形態やおおよその構造が類似するものでも、構築技法や石材使用の方法において直接の関連は見られないことがわかる。従って、これまで「百済系」「熊津系」とされていた湖南地方の横穴式石室は百済の中心勢力との関係で造られたものとはいえない。一方で、百済の西海岸地域に湖南地方の石室と構造・技術的に類似したものがあり、百済の特定地域集団との関係を想定することができる。

【キーワード】 湖南地方、横穴式石室、空間設定、王畿系造墓集団、石材使用指数

## はじめに一熊津期の百済と湖南地方

本稿では、韓半島三国時代の百済と栄山江流域を中心とした湖南地方の諸集団との関係を論じるという命題のもと、その一資料として横穴式石室を取り上げ、両地域の関わりの断片を提示したい。湖南地方（全羅道地方）の古墳が最も多様化する時期は5世紀後半から6世紀前半までである。それ以前は原三国時代の周溝墓から墳丘墓系統の墳墓が発達した時期で、それ以後は百済中央（泗泚期）の石室墳が浸透する時期にあたる。土着系の墓制の展開期と百済系墓制の普及期に挟まれたこの段階に、湖南地域では甕棺古墳や竪穴式石槨墓、横穴式石室墳、前方後円形古墳（倭系古墳）などが混在し、埋葬施設や葬法などの面において最も多様化を見せる。

この時期は文献史料の内容から設定された百済史の時期区分によるとまさに熊津都邑期（475～538年）にあたっており、この時期の湖南地方の集団に様々な内部的発展と他地域からの影響が存在したことは明らかで、その背景には政治史的解釈や文化史的説明など多方面からのアプローチが必要である。本稿では、複雑に展開する湖南地方と熊津期百済の諸墓制のうち、横穴式石室の築造技術に共通点と相違点を見出すことで、両地域の造墓行為の系統や工人の動向について考察する。

## ①……………地域間交渉を表す資料としての横穴式石室

### 1. 百済墓制における横穴式石室の役割

三国時代の他の地域に比べ、百済の墓制は種類も多くその展開が複雑である。ただし、その多様な墓制を系統ごとに大まかにまとめると、原三国時代馬韓からの伝統を継承する内部主体に木棺系施設を用いたものと、外部墓制の影響のもとに導入された外来系統のものに分けられる。漢城期には伝統的な木棺墓系統の墓制である土壙墓、木槨墓、石槨墓、墳丘墓、木棺封土墳（葺石封土墳）などが地域集団や階層ごとに重層的に展開し、それらとの区別を狙って積石塚が特定階層（王族）に導入されたと考えられる。初期の横穴式石室も別勢力によって同様の脈絡で導入されたのかもしれない。つまり、墓制の社会的側面を重視すると、漢城期は多様な墓制の種類に諸勢力のランキングや地域色、アイデンティティが表現されていた段階であるといえる。これは必ずしも政治的な統合の度合いとは関連しない。湖南地方の墓制の甕棺墓への転換も、アイデンティティ発露の結果である可能性がある。

一方、熊津期になると確実に王陵級古墳に横穴式石室が導入され、同時に諸地方勢力所在地にも面的に浸透するようになる。この現象は百済王権を中心に墓制の種類がある程度統合されたことを表しており、横穴式石室を媒体とした墳墓の序列化がなされたことを示す。ただし、この段階ではまだ他の墓制が完全には払拭されておらず、横穴式石室自体にも厳密な規格や斉一性が見られないことから、王権の墳墓築造への関与はさほど強いものではなかったとみられる。この時期の古墳出土品に可視的効果を狙った身分表象としての装身具がある点からも、王権による諸集団の直接支配は貫徹されていなかったと思われる。

墳墓築造が王権によって厳しく統制され、その築造が諸階層および地方統治の手段となったのが泗泚期（538～660年）である〔山本2002〕。精巧な構造や厳密な規模の制限によって規格化した石室墳からは、国家の制服としての装身具が出土し、被葬者の官人化を反映している。

熊津期は、このように墳墓の意味や役割が大きく変化する転換期にあたっており、横穴式石室はその転換を主導し後の百済の主墓制となる象徴的墓制であるといえる。同じ時期に湖南地方にも同形式の古墳が造られるようになったことは大きな意味を持つ。さらに加耶・新羅・日本列島でもほぼ同様の時期に類似した構造を持つ横穴式石室が造られており、それらを熊津期百済の影響と考えることがあるため、この時期の石室築造の動向に対する分析は広い視野から行われる必要がある。

## 2. 横穴式石室墳拡散の技術的背景—構造系譜と技術系譜

前述のように、百済とその周辺地域では熊津期に並行する時期に横穴式石室が定着し、広い範囲に浸透した。このような横穴式石室の拡散と系譜に関する検討は、これまで石室の構造や形態に主眼をおいて行われてきた。構造・形態が類似する石室を系譜の同定に利用する視点はこれまでの基本であったが、ここでは系譜関係をさらに綿密に論じる際のもう一つの要素として、築造技術に対する検討を行いたい。

まず、形態や構造的特徴が共通するものを同系統とする考え方を「構造系譜」と表現しておく。百済の場合、方形プランの玄室に穹窿状天井を持つものを「宋山里型石室」として同様の形態・構造を持つものを一括りにしたり、断面六角形の平斜式天井を持つものを「陵山里型石室」として泗泚期に広まった石室を同一系統のものとするところがある。それぞれの形態的・構造的な特徴から北部九州型、肥後型、畿内型などを設定している日本列島の横穴式石室も同様の観点のものである。墳丘形態などとは異なり、石室は構築・埋葬行為終了後に誰もが内部を見ることはできないため、単なる外観模倣によって同じものを他地域に築造するのは困難であったはずである。従って同形のもので再現された背景としては、被葬者間に構造・形態についての共通認識がありそれを築造者（造墓集団）に伝達・発注した場合、築造者が共通認識のもとに築造した場合、設計図のようなものが介在していた場合などの状況が挙げられる。ともかく、石室の形と構造に対する共通認識が発注者か築造者の間で共有されていれば、構造系譜を同じくする石室は造られ、広まったと考えられる。ただし、同一の構造系譜を持つ石室が異なる地域に現れる背景を明確に提示するのは難しく、系統として無関係でありながら類似した形態を持つ石室同士を結び付けてしまうことも大いに起こり得る。

それに対し、おそらく純粋に築造者の技術や慣習が反映されるのが「技術系譜」と表現できるものである。構造系譜と重なる属性もあるが、技術系譜は使用石材の種類や石材の加工法、積み方など、築造技法を共有するものと規定できる。これらは専門的な工人集団の習熟度や技術水準などが関わってくるもので、発注者としての被葬者やその継承者が直接関われる部分ではない。すなわち、技術系譜を同じくする石室は、同じ造墓集団ないし同系統の造墓集団の手によって築造されたと判断することができる。穿った見方をするならば、技術系譜を同じくする石室が造られた地域には、横穴式石室の築造とその序列化を主導していた集団により造墓工人集団が派遣されていたと考えることもできる。当然ながら、構造系譜のみが共通するものより、構造系譜と技術系譜の両者が共通

するものの方がより直接的な関係にあるといえるため、横穴式石室の拡散を語る上では本当の意味で「同系統」である蓋然性が高いということになる<sup>(1)</sup>。

本稿の以下の検討では、特に技術系譜に注目して資料を点検し、形態的に類似する石室を同系統とみてよいかどうかという問題に一観点を提示したい。

### 3. 湖南地方の横穴式石室に対する視点

具体的な資料の検討に先立ち、本稿で扱う湖南地方の横穴式石室の概要と研究史について触れておく。湖南地方の横穴式石室については、その形態・構造をもとに大まかに分類し、それぞれの系統を論じる研究が主流である。地域的には、百済の直接的な影響が色濃い全羅北道地域と、独自の文化を長期間保っていた全羅南道地域（榮山江流域）に分けて考える見方が一般的である。全羅北道では早くから百済の影響が見られ、横穴式石室も益山笠店里古墳群や熊浦里古墳群、群山山月里古墳群などで比較的早い段階に築造されている（図1）。金属製装身具や土器などの出土遺物、石室の形態・構造などから、百済との関係は疑いないようにみえる。対して、蘆嶺山脈を南に越えたいわゆる榮山江流域でも横穴式石室が導入されるが、これらに関しては様々な見方がある。

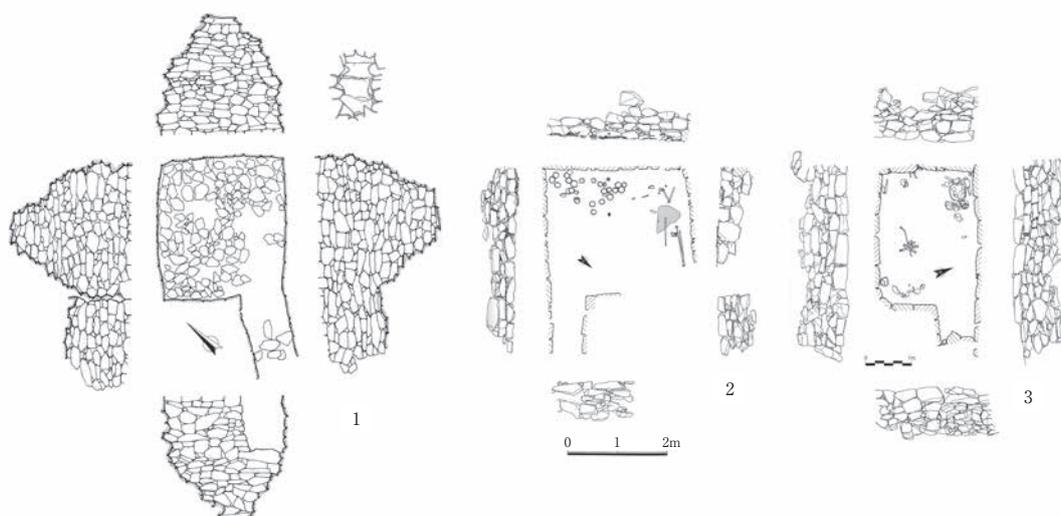


図1 湖南地方北部における百済の横穴式石室（文化財研究所 1989, 群山大学校博物館 2004）  
1：益山笠店里1号墳 2：群山山月里3号墳 3：同2号墳

「榮山江式石室封土墳」[林永珍 2000], 「月松里型石室」[朴淳發 2000], 「榮山江型石室」[柳沢 2002], 「初期大型石室」[金洛中 2008] など様々な名称で呼ばれている榮山江流域の横穴式石室については、林永珍の論考[林永珍 1990]以降、百済との関係を主軸に系統論が論じられている。なかでも曹根佑の研究[曹根佑 1996, 2007]では、榮山江流域の横穴式石室を型式分類した上で編年を行ってそれぞれのタイプの系統を論じており、現在の認識に至る基礎作業となっている。また、前方後円形古墳の認識と発掘に伴い、その埋葬施設について論じられる中で横穴式石室についても改めて日本列島との関係がクローズアップされている[柳沢 2002]。

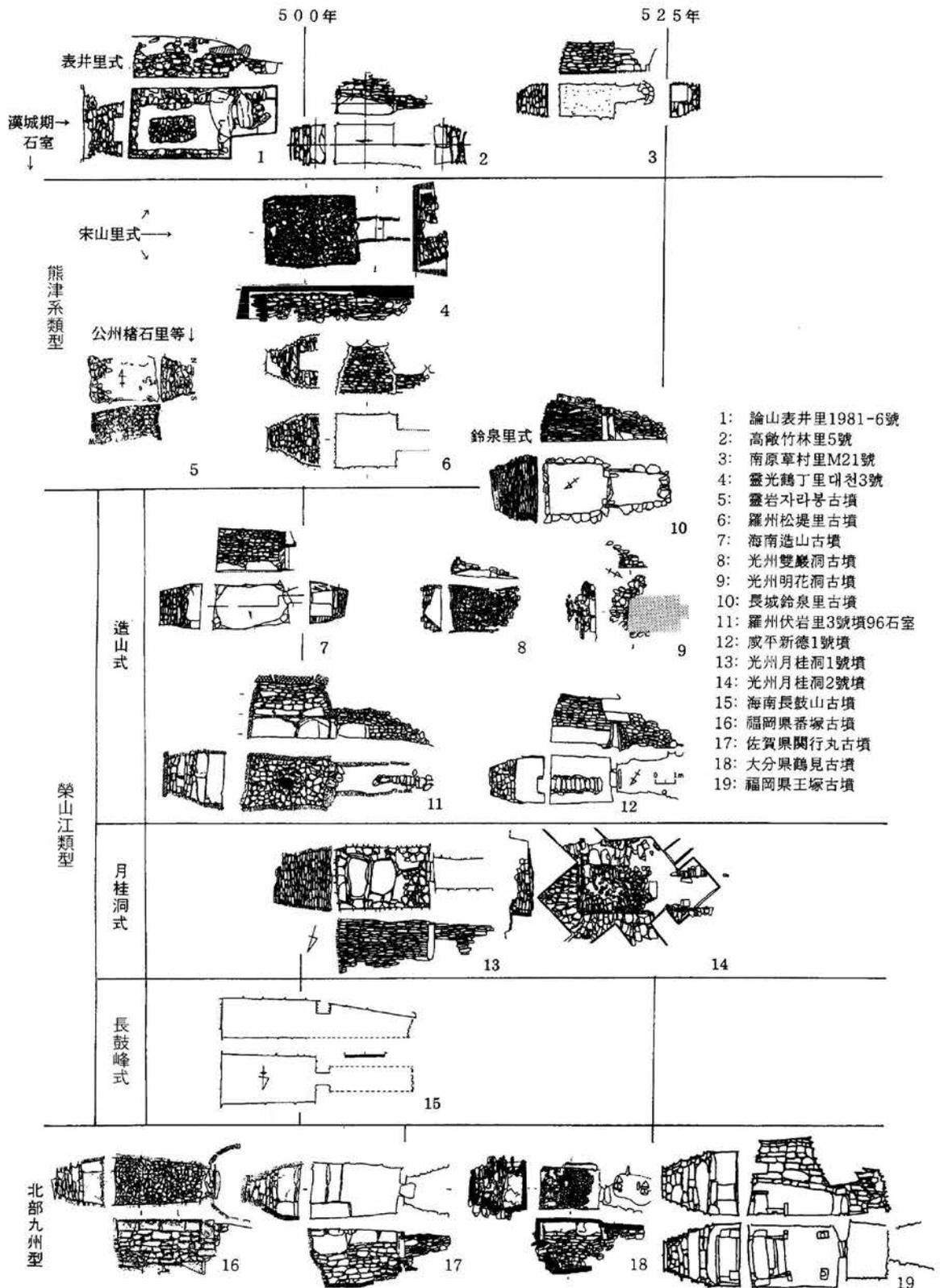


図2 湖南地方西南部地域の初期横穴式石室変遷図(金洛中 2008)

栄山江流域の横穴式石室の系統についてはおおむね百済系、非百済系、九州系の3つの系譜が説明されている〔曹根佑 2007〕。さらに、これらがすべて単一の脈絡で出現したものではなく、系譜が異なるものが相互影響関係を持ちながら混在したとし、熊津系類型と栄山江類型（北部九州型の影響を受けたものを含む）に分ける考え方も提示されている〔図2／金洛中 2008〕。さらに金洛中は同地域の石室を、加耶地域のものもふまえて「導入型」「在地発展型」「在地創出型」に区分し、原型からの変化の過程を跡付け、その導入・変遷にあたっての栄山江流域の在地勢力の主体性を重視している〔金洛中 2008〕。

このように、湖南地方の初源期横穴式石室については、形態・構造による分類と、それをもとした石室自体の系譜関係および被葬者の出自などが論じられている。なかでも百済との関係が色濃い全羅北道に比べ、様々な要素を含む栄山江流域の資料については、多くの学説が提示されている。資料的特徴に関連して目に付くのは、やはり当該地域の横穴式石室が資料の少なさに比して分類される型式の数が多という点である。このことが多様な系譜論の直接の原因になっていることは間違いない。さらに、解釈の特徴として、それぞれの系譜論がそのまま政治的解釈につながっているという点が挙げられる。文献に登場する百済・加耶・倭などの政治勢力の狭間にあつて、この地域がどのような「政治的役割」を担っていたのかという、過度な歴史物語的役回りを演じさせられている結果といえよう。

実際には、栄山江流域の横穴式石室の在り方は漢城期百済の横穴式石室と共通するところがある。漢城期の横穴式石室は、形態・構造的に非常に多様であったことがわかっているが、それを系譜の差として論じ、それぞれ独自の外部的影響があつたとみる解釈はない。筆者は、これを百済の地方勢力の文化的多様性および政治的独立性の反映とみているが、栄山江流域の場合も同じように考えることはできないだろうか。

## ②……………築造技法から見た百済の横穴式石室と「王畿系集団」

上述のように、本稿では従来の形態・構造による系統論に加え、技術的側面を加味した系譜の検討を行っていく。今回は熊津期の百済と湖南地方の横穴式石室の関係について論じることを目的としているため、代表的な古墳の構築技法を確認して類型化を行い、比較検討の素材とする。

### 1. 百済中央の横穴式石室構築技法—公州宋山里古墳群と周辺古墳群

熊津期百済と他地域の横穴式石室の系譜関係を検討するために、まず当時の百済の中心勢力の墳墓群である公州宋山里古墳群に対する再認識が必要となる。日本の植民地時代に調査された宋山里古墳群は近年再調査が実施され、遺構実測図や出土遺物などの資料が整理・報告されているため〔国立公州博物館・公州市 2012〕、その内容をもとに再検討を行う。

いわゆる「宋山里型石室」〔曹永鉉 1990, 東 1993〕は、正方形に近い玄室に左片袖式羨道が付き、穹窿式天井を架構したものが典型である。この派生型には玄室が長方形に近いものもあり、地方では羨道が前壁の中央にあつたり（両袖式）、稀に右片袖式のものもあるが、玄室プランが方形であることに重きをおいて宋山里型との関連を指摘する機会が多いように見受けられる。「穹窿」はも

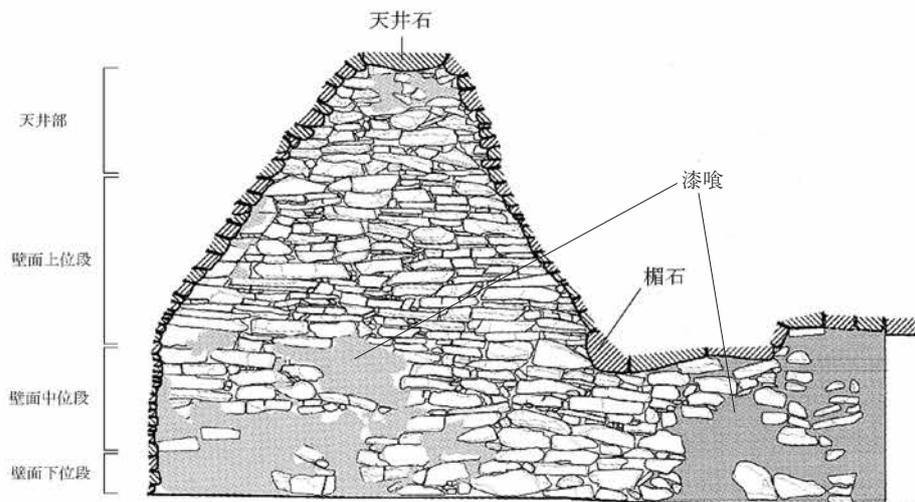
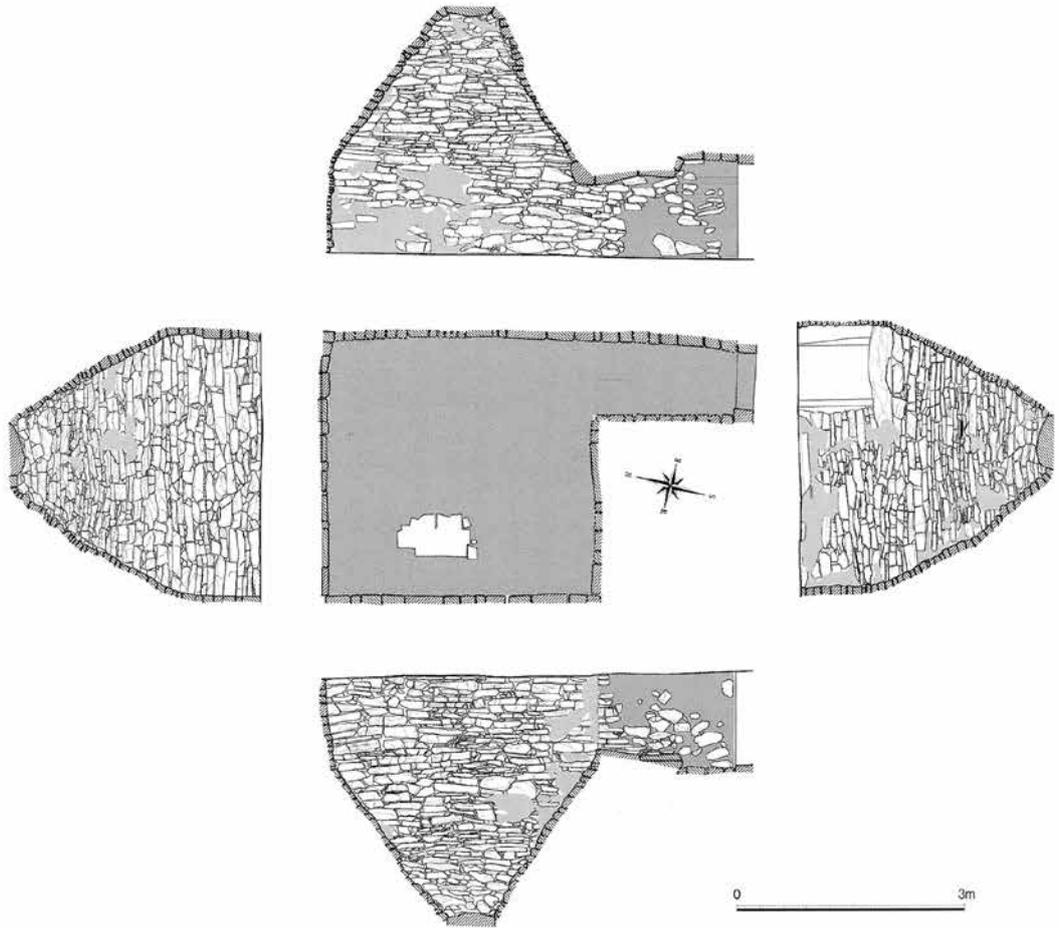


図3 公州宋山里5号墳の実測図(国立公州博物館・公州市2012を編集)と各部位

とも弓形をなす天空の意で、建築では半球形ないしドーム状の天井を指す。宋山里古墳群では朝鮮総督府の発掘調査の報告において「穹窿状」の用語が使用されている〔野守・神田 1935〕。

宋山里型石室では、四壁を構築する際に上部を徐々に持ち送って天井を狭めていき、最終的に大型の天井石1枚を架構する。壁は下部では隅角が明確であるが、途中から抹角（隅丸）となり、天井部においては円形をなす。この穹窿式天井を熊津期石室の特徴の一つとして挙げることが多いが、実際には玄室の平面が正方形であれば、天井を架構する都合上、四壁を狭めるのが最も合理的であり、重量を分散して崩落を防ぐために天井が高いドーム状になるのは自然である。仮に正方形墓室の四壁のうち二壁だけを持ち送って天井を架構しようとするれば天井はさらに高くなり、重量が分散しない構造となるため、崩壊の危険も増して現実的でない。つまり、穹窿式天井は玄室プランが正方形であることに付随した要素であり、石室の空間設定に直結するものであるといえる。さらに、石室内で執り行われたであろう埋葬・祭祀行為などの各種活動のためにも天井が高く広い空間は至便であり、身分に応じて異なっていたであろう祭祀形態や副葬品の配置のためにも、高位階層の墳墓は広い空間が必要であった。方形プランの墓室と穹窿状の天井は、そのような諸条件を満たした必要最低限の構造だったのであろう。

実際に宋山里古墳群の石室はどのような技法で築造されているのか、宋山里5号墳の構築の手順を追うことでその技術を復元したい（図3）。宋山里5号墳は玄室規模が東西3.2m、南北3.45mの方形のプランを持ち、天井の高さは3.11mに達する。羨道は長さ2.5m、幅1.0m、高さ1.0mで、左片袖式である。古墳築造の手順としては、おおまかにA墓地の選定、B墓壙の掘削、C石室プランの設定、D石室の構築、E封土の被覆の工程を想定することができ、その合間に各種祭祀や埋葬、閉塞など埋葬の主体となる行為が伴う。ただし、本稿は石室構築の技術的系譜を検討しようとするものであるため、埋葬行為や墓地の選定など、被葬者やその後継者ら古墳築造の「発注者」が主体となる行為は排除し、主に石室の築造技術者、つまり「受注者」「施工者」側が主体となる作業に限定してその工程を考えたい。

その場合、上のCとDが対象となり、作業工程を細かく分けていくとまず葬地からは切り離された場所での作業として①石材の採掘・運搬（集積場での選定と加工・搬出）があり、葬地での作業として土壙の掘り込み・整地に続いて②玄室幅の設定と奥壁基底石の設置、③玄室全体プランの設定と基底石（下位段）の設置、④玄室中位段の四壁独立積み上げと羨道の設置、⑤楣石の設置と羨道天井の架構、⑥玄室壁上位段の持ち送り架構、⑦天井部の架構、⑧天井石の設置となる。詳細な観察はなされていないが、おそらくそれぞれの工程と並行して墓壙と石室の間に裏込めを充填していく作業が行われたであろう。特に穹窿式天井の場合、天井部の持ち送りの角度が急であるだけに、裏込めの併行は必須であったと思われる。また、漆喰の塗布は天井石の架構前と架構後の二つの可能性がある。宋山里4号墳では天井石内面にのみ漆喰が付着しておらず、前者の可能性を示唆しているが、後世に剥落したものかもしれない。

以上の作業工程の根拠となる観察所見は以下の通りである。壁面構築については、特に「作業変換点」に注目した（図4）。

① 割石積石室の場合、石材の採掘と加工・運搬・構築が同一の集団によってなされたのかは不明である。大型の切石などの場合は、石材の大きさが石室の構造や形態に直結するため、石室構築集

団が採石場で石材をおおよその大きさと形状に整えてから搬出していた可能性が高いが、割石の場合はこの限りではない。石材の集積・保管場所が別途存在したことも想定しておく必要がある。最終的に石材の調整加工をしたのは当然石室を構築しながらの段階である。積みながら石材の大きさ・形状を整えることはもちろん、個別石材の面取り作業も現地で行われたはずである。その際に出た石屑は、石室の裏込めに使用されたり片付けられたのであろう。

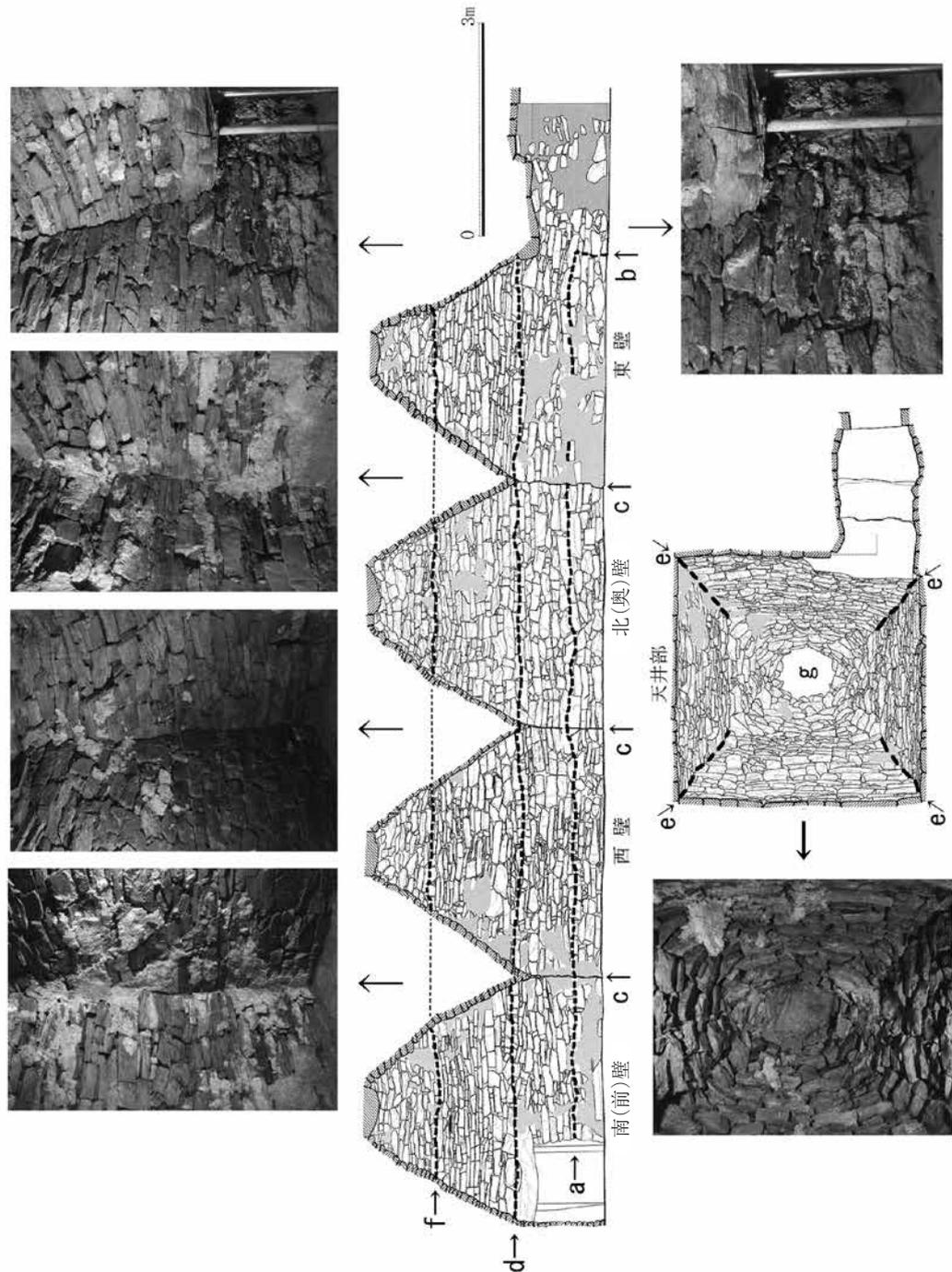


図4 宋山里5号墳の展開図と構築工程概念図

② 宋山里古墳群の石室では、壁面上位段（天井直下）まで四壁の隅の石材を噛み合わせず独立的に構築している。基準は墓壙の最奥部にあたる奥壁であり、まず玄室幅の設定を兼ねた奥壁基底段の設置が最優先に行われるのが通例である。奥壁の下位段（基底部）は高さ50cm程度の位置で横目地が通っており、この高さまでをとりあえず積んで次の作業に移ったのであろう。

③ 奥壁基底部の設置の次には、同じ高さで両側壁、前壁の順で下位段を構築し、玄室のプランを確定させている。四壁の下位段上面に見られる横目地はこのときまでの作業工程を表しているようである（図4-a）。側壁は奥壁の前面に取り付けるようにして配されているので、やはり奥壁の設置が前提となっていることがわかる。また、前壁は側壁の前方に接して取り付くので、やはり側壁の設置が前提となる。このとき、羨道部分を除いた玄室プランの基底部のみをまず構築したと考えられるが、その根拠は東壁の下位段のみに前壁と一致する位置に見られる縦目地である（図4-b）。この段階を第1作業変換点としておく。

④ 上記のようにまず玄室下位段基底の敷設を完了した後、玄室中位段までの構築が行われたと考えられるが、床面から高さ1.2m程度までの中位段でも四壁が独立的に積まれており（図4-c）、壁面の角度も垂直に近い。ただし、先に触れたように左右側壁は奥壁の前面に接して造られているため、この工程では側壁の構築を多少なりとも先行させ、奥壁をそれにもたせかけるように積んでいった。前壁の構築も同様である。また、この段階で羨道の敷設も始まっているが、東壁下位段の玄室と羨道の境界で見られた縦目地が中位段からは見られず、中位段以上で玄室東壁と羨道東壁を一体的に構築している点からもそのことがわかる。

⑤ 宋山里古墳群の石室石材の中で、天井石に次ぐ大型の石材が楣石に使用された石である。楣石は羨道天井石と同じ高さになっており、羨道天井石の一部を兼ねる。玄室壁面の中位段および羨道側壁を構築した段階で玄門部に楣石を架構する。当古墳群の石室には玄門に他の施設（框石・袖石など）はなく、楣石と羨道天井石は同じ段階で架構している。さらに楣石上面と同じ高さで玄室四壁を通じて横目地が通っていることが確認でき（図4-d）、この段階で作業が一区切りしていたことがわかる。ここを第2作業変換点としておく。

⑥ 宋山里古墳群の石室では、楣石の高さから四壁の持ち送りを急激に行い、上位段を狭めていく。ただし、ある程度の高さまでは四壁は依然として独立的に構築されており（図4-e）、引き続き前・奥壁を側壁にもたせ掛けるようにして構築する。四壁の隅の石材を交互にかませて隅を丸くするのは最上位段（天井部）からであり、その手前で一度作業を止めたことを表す横目地が通っている（図4-f）。ここまでで第3作業変換点を設定できる。この箇所より上を天井と見てよい。

⑦ 天井部の石積みでは、東西南北の壁を区別できるような縦目地は見られない。むしろ意図的に角をなくして丸く積み、上部の石材の重量を分散させることで高いドーム状の天井を造っている（図4-g）。こうすることで下半部で独立的に構築された各壁の崩壊が防がれた。当然ながら石室と墓壙の間の裏込めが同時に行われていたはずである。墓室中心の天井部が最も高くなる穹窿式構造では、長方形の玄室に平天井を架ける場合よりも崩落のリスクが高かったと考えられるため、当然完成まで壁面と天井を支える構造物が内部にあったと思われる<sup>(4)</sup>。このため、石室が完成するまでは内部で埋葬や葬送に関わる祭祀などは行われなかったであろう。

⑧ 石室構築の最終作業として天井石の架構がある。純粋な穹窿式天井では基本的に天井石が1枚

のみ載せられている場合が多い。壁面に小型の石材のみを使用している宋山里型石室の場合、天井石の架構は最後の一大作業であったと思われる。後述のように、壁面の石材を積む作業はある程度人力のみで行えたと考えられるのに対し、羨道と玄室の天井石は人の力で持ち上げるのは不可能であるため、石室上に石材を吊り下げ(5)るための槽を建てたり石材を引っ張り上げるための搬入路が設けられたりしたはずである。いずれにせよ、天井石を置く段階には墓壙と石室の間の裏込めなし天井部までの封土は完成していたはずである。

以上のような構築工程の復元から、熊津期における百済中央の石室の技術的特性としては、面取りした割石の使用と面を揃えた壁面、漆喰の塗布、奥壁・側壁・前壁の順に設定する玄室プラン、上位段まで独立した四壁の構築、円形ドーム状に変化する天井部、中位段において玄室壁面と同時に構築した羨道などが挙げられる。技術面の共有は、単なる形態の模倣や設計図の共有にとどまるものではなく、古墳築造の作業集団(造墓工人集団)の特徴を表すものと判断される。

## 2. 横穴式石室の石材利用と空間設定

石室の構築技術を復元する際に重要な要素に使用石材がある。従来より横穴式石室研究は平面形や羨道の位置、天井形態などの構造的要素が主に注目されてきたが、埋葬(追葬)・副葬・祭祀の実施が石室構築の第一義であることを考えると、どれほどの規模(広さ・高さ)・形状の内部空間を造り出すかということこそ最重要事項であり、空間の設定とその創出は、個々の石材の大きさ・形状とその使用法に大きく左右される。

このように、使用石材の加工による形状と大きさの決定は、石室構築の技術的側面を考える際に重要であるとともに、石室の内部空間(広さや形状)を設定する上で最初に考慮されるべき要素であったはずである。石室と石材の関係に関する詳細な考察は別稿に譲るが、特別な装置を用いず一人ないし数人の人力で持ち上げて構築することができる程度の大きさ(重量)の石材を使用した石室と、人間の力では積み上げが困難で何らかの装置が必ず必要であった石材を使用した石室では、当然ながら構築の人数や作業班編成、手順など技術系統全般が異なっていたはずである。

熊津期の石室石材を見ると、宋山里古墳群の横穴式石室では比較的細かく割った扁平な割石を積んでいる。おそらく一人から数人の人間が石材一つずつを持ち上げて積んでいくことができたであろう。石材の種類は地域によって異なるが、扁平で幅広な石材の方が穹窿状の墓室を架構するのに適していたであろうことは容易に想像できる(6)。さらに、宋山里古墳群では壁面に漆喰を塗布している点が重要な特徴である。壁面を構築した割石は内側の面が揃うように面取りがされているが、これは最終的に漆喰を全面に塗って壁面を整える必要があったためであろう。

さらに、石室を構築する前に当然計画されていた墓室の平面積と空間体積を実現するために、石材の大きさと必要数量が想定されていたはずである(7)。その公式は石室の構造や形態によって大きく異なるため、公式と具体例の提示によるケーススタディは次稿に譲るが、石室内空間に対する使用石材の数量の割合〔石室体積÷石材数〕を石材使用指数Aとしておく。さらに、石室壁面の全体表面積に対する石材数量の割合〔(石室壁面表面積－玄門部面積)÷石材数〕を石材使用指数Bとする。同一の造墓集団であれば、どのような大きさの石室を構築する際にも同じ石質の石材をほぼ同形同大に加工して使用する可能性が高いと仮定すると、石室の規模は変わっても石材使用指数はほぼ同

---

じ数値を示すことが予想される<sup>(8)</sup>。すなわち、石材使用指数はある特定の集団が自集団の技法で特定規模の石室を構築する際に、どの程度の量の石材を調達し準備する必要があったのかという石室構築の計画面を表す指数でもあるといえる。この使用石材の調達と加工の計画性も、同一ないし同系統の造墓集団が共有していた特徴で、集団の系統を把握する上で重要な要素とみたい。

このような技術的特徴を共有する古墳群同士は、造墓集団を共有する被葬者集団のつながりを表すものであり、そこに王陵級古墳群である宋山里古墳群が含まれることから、当時の百済の中央組織に関わる集団の墳墓である可能性が高い。おそらく、中央組織が所有していた造墓工人を、関連が深い集団の造墓行為にあたって派遣するなどしていたのであろう。本稿では、上に見た2つの要素、すなわち①石室壁面や天井部などに遺る構築手順を表す痕跡から復元できる共通する工法、②同一サイズ・形状に揃えた石材の加工とその共通する使用指数を、熊津期の百済、特に宋山里古墳群とその周辺に多く見られる特徴ととらえ、中央支配者階層の造墓に関わっていた同一集団に帰属する技法と仮定し、この集団を「王畿系集団」と呼びたい。このような観点から導き出される共通項を持つ一群の石室は、石室の規模や構造の違いを超えて同一ないし同系統の造墓集団を抽出するための一手段になると思われる。

### 3. 王畿系集団の活動範囲

上述した技術的側面からみて、同様の技法で構築された石室が分布する範囲を王畿系集団の活動範囲として想定したい。このような特徴を持つ石室は、宋山里古墳群以外に公州の外郭にある有力古墳群である金鶴洞古墳群、新基洞古墳群などの石室にも見られ(図5)、これらに関しては同一の作業集団、つまり上で設定した王畿系集団による石室構築を考えてよいと思われる。逆に宋山里古墳群から比較的近い距離にある公州熊津洞古墳群などの石室は、技術的に見ると完全に異なる集団が築造したものとみることができる(図8)。形態ないし構造的に宋山里古墳群の方形石室に類似していても、使用石材や構築工程に差があれば、同一集団による築造とは判断できない。

一方で、築造技術は共通するが、宋山里古墳群と金鶴洞古墳群など周辺地域の古墳群の石室の間には規模と平面形の差がある。例を挙げると、金鶴洞1号墳が玄室長さ258cm、幅184cm、2号墳が玄室長さ272cm、幅154cm、高さ217cm、8号墳が玄室長さ237cm、幅135cmで、金鶴洞1991年調査の2号墳が玄室長さ208cm、幅112cm、高さ130cm、同2号墳が玄室長さ203cm、幅108cm、高さ130cm、新基洞1号墳は玄室長さ280cm、幅144cmを測る。これらと王陵級古墳との規模の差は、公州地域内の立地などから考えて被葬者の階層差を反映していると思われるが、規模は異なっても石材の用法(石材使用指数)や構築法は同じである(図6)。宋山里古墳群が方形玄室に穹窿式天井であるのに対し、金鶴洞古墳群などの石室は玄室の平面形が長方形のものが大部分を占めるが、一般的な長方形石室のように側壁を内側に持ち送らせ数枚の天井石を架けるのではなく、側壁は垂直のまま前・奥壁を狭めることによって天井に基本的に1枚の大型石材を架構している。おそらく天井石の数を1枚に抑える意図もあったのであろう。さらに、壁面は上位段まで四壁を独立させて構築するが、最上段では隅をなくして丸く積み上げており、やはりドーム状の天井になっている。玄室平面形は異なるものの、構造としては穹窿式に準ずるものであり、準穹窿式

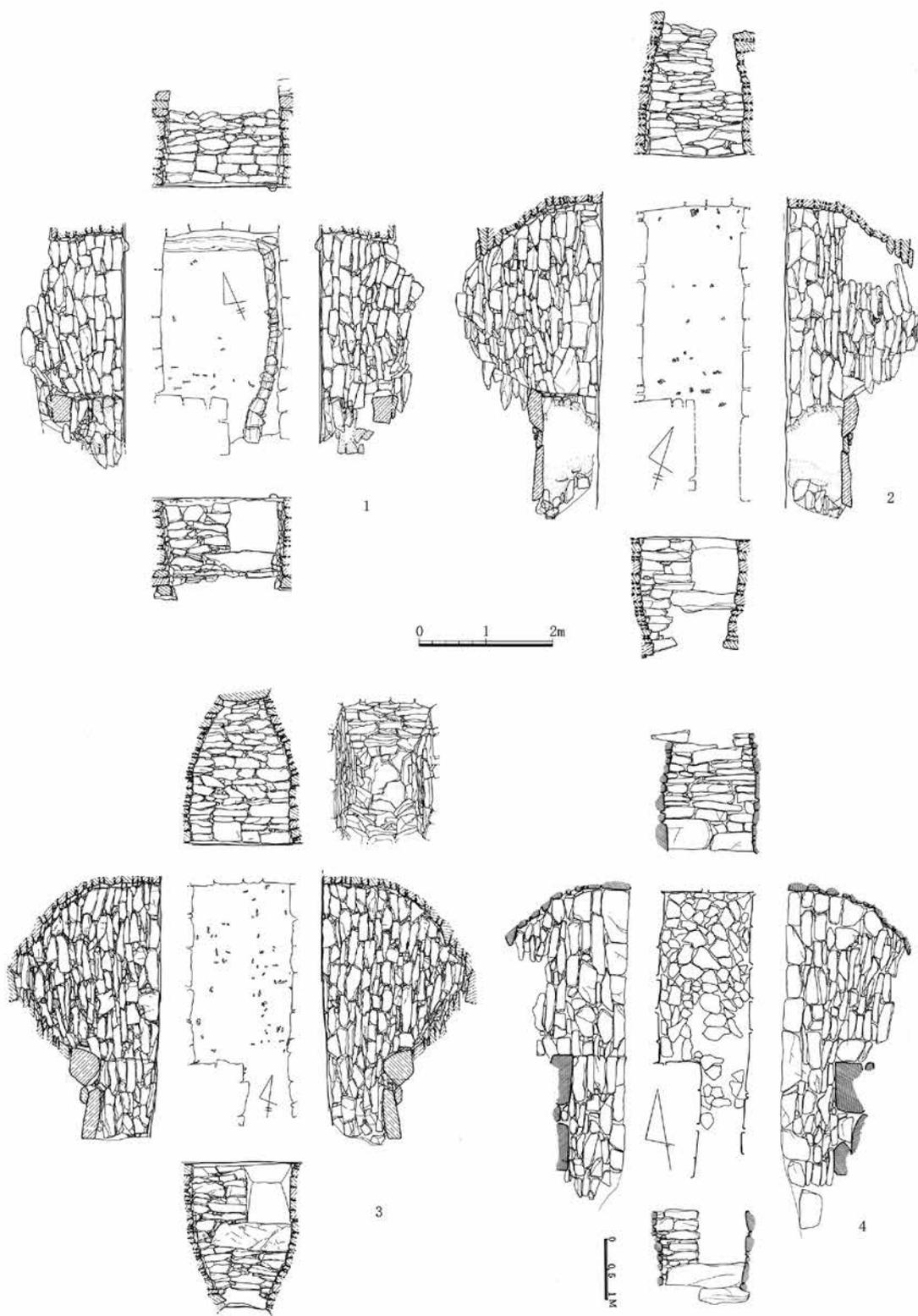


図5 公州金鶴洞・新基洞古墳群の横穴式石室 (柳基正・梁美玉 2002, 安承周・李南爽 1993 を編集)  
1: 金鶴洞1号墳 2: 同8号墳 3: 同2号墳 4: 新基洞1号墳

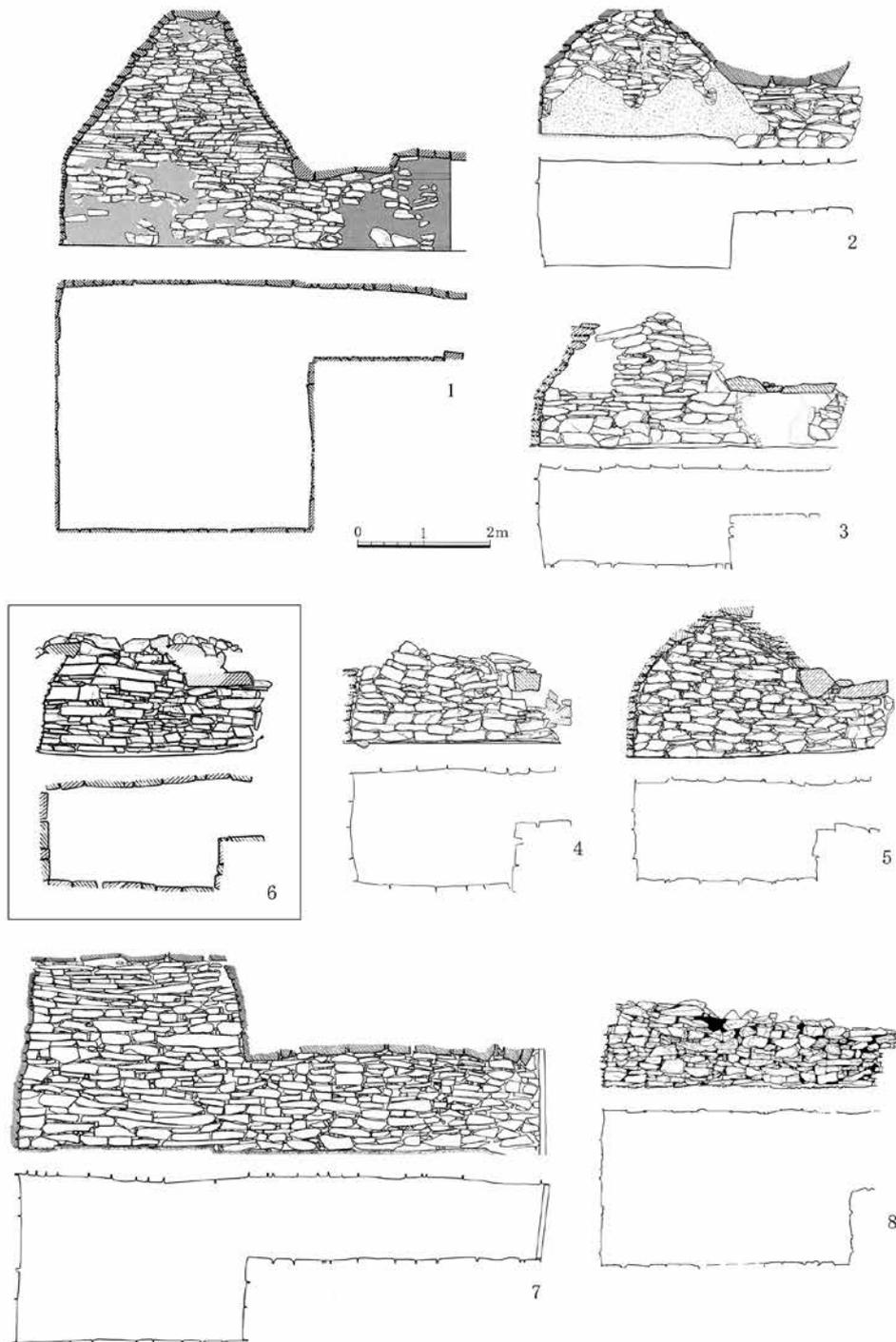


図6 王畿系集団の石材構築法と多様な床面プラン(各報告書を編集)

1: 公州宋山里5号墳 2: 公州金鶴洞91-2号墳 3: 同8号墳 4: 同1号墳,  
5: 同2号墳 6: 漣川江内里7号墳 7: 高靈古衙洞古墳 8: 大阪府高井田山古墳

天井とっていい。同じ造墓集団が異なる形態の石室を構築した結果とみてよいであろう。

王畿系集団の技術と同様の特徴を持ち、宋山里古墳群をはじめとする公州地域の石室につながる可能性がある前段階の石室の候補として河南甘一洞古墳群、城南板橋洞古墳群が挙げられる(図7-1・2)。板橋洞古墳群の石室は壁面最下段に大きめの腰石を設置する例もあるが、おおむね内面を揃えた比較的小型の割石を積んで築造しており、側壁を垂直に、前・奥壁を持ち送って構築するという特徴を持つ。羨道は左片袖式で玄室の四壁を下段でそれぞれ独立的に構築している点も王畿系集団の特徴的な作業工程であるといえる。公州地域とは地理的には離れており、今後はより綿密な年代的先後関係の検証が必要であるが、公州地域の横穴式石室より先行する可能性が高いため、のちに王畿系集団として組織される集団が当地で活動しており、王族の南遷とともにその造墓集団として採用されたのかもしれない。そのように考えることで、熊津期の王族に最初から定型化した横穴式石室が導入された背景を説明することができる。甘一洞や板橋洞の築造集団が公州周辺で活動した可能性、公州付近に移動した可能性を含め、詳細な検討が必要である。

さらに、類似した構造と築造技法を持つ横穴式石室が漣川江内里遺跡で調査されている(図6-6, 7-3)[高麗文化財研究院2012]。出土土器などから高句麗の古墳群であることが指摘されているが、百済では熊津期以降に定着する各種形態の鍔座金具が出土しており、葬制の上でも百済の横穴式石室の一つの祖型となる可能性がある。石室の特徴を見ると、板橋洞や公州地域に多い玄室平面長方形の左片袖式石室で、天井は上述の準穹窿式といえる構造である。天井部をドーム状に架構する技法は、高句麗の横穴式石室に特徴的な三角持ち送りを割石で実現したものと推定される。残りの良い江内里7号墳の構造を見ると、壁面の下部は四壁を噛み合わせずに構築しているが、上部において隅石を斜めに渡して長方形プランをドーム状に変化させている様子がわかる(図7-3)。石材も内面を揃えた割石を用いており、のちの王畿系集団の使用石材と共通する。百済の王畿系集団の前身と仮定した漢城期の石室構築集団の一派に、高句麗の石室の系統が影響を与えていたことを想起させる資料である。王畿系集団の起源の一つの候補といえる。ちなみに、江内里の横穴式石室は、玄室の奥壁側の幅が前壁側の幅よりやや狭いという構造上の特徴がある。奈良県の寺口忍海古墳群などに類似したプランを持つ石室があるが(図8-10・11)、現在のところ両者を結び付ける明確な根拠は見出し難い。

翻って、百済地域以外で王畿系集団の技術系統を保持した集団の手による築造と考えられるのが高霊古衙洞古墳の石室である。公州地域に多い準穹窿式天井ではなく、前・奥壁を垂直に、側壁上部を持ち送ってトンネル状の天井を架構しているが、これは塙築墳の影響を受けた後に公州地域で築造された石室の流れを汲むものであろう(図7-4)。石材加工やその使用法、壁面の構築法は公州地域の石室と共通しており、熊津からの何らかの技術提供があったことを想起させる<sup>(9)</sup>。

大阪府の高井田山古墳[柏原市教育委員会1996]は、この時期の百済の横穴式石室との類似性が早くから指摘されていた(図7-5)。石室全体のプランや石材使用法などは非常に類似した特徴を持ち、出土遺物からも被葬者が百済系の人物であることが指摘されている。地山を掘り込んで石室を設置する半地下式構造である点も韓半島の横穴式石室との共通点である。高井田山古墳の石室は玄室規模が3.73m × 2.34mの左片袖式石室で、基底部分のみが残存するが、石材は比較的小型の割石ないし扁平な自然石を用いて全壁面を構築していたことがわかる。残存する玄室下段の隅の構築を<sup>(10)</sup>

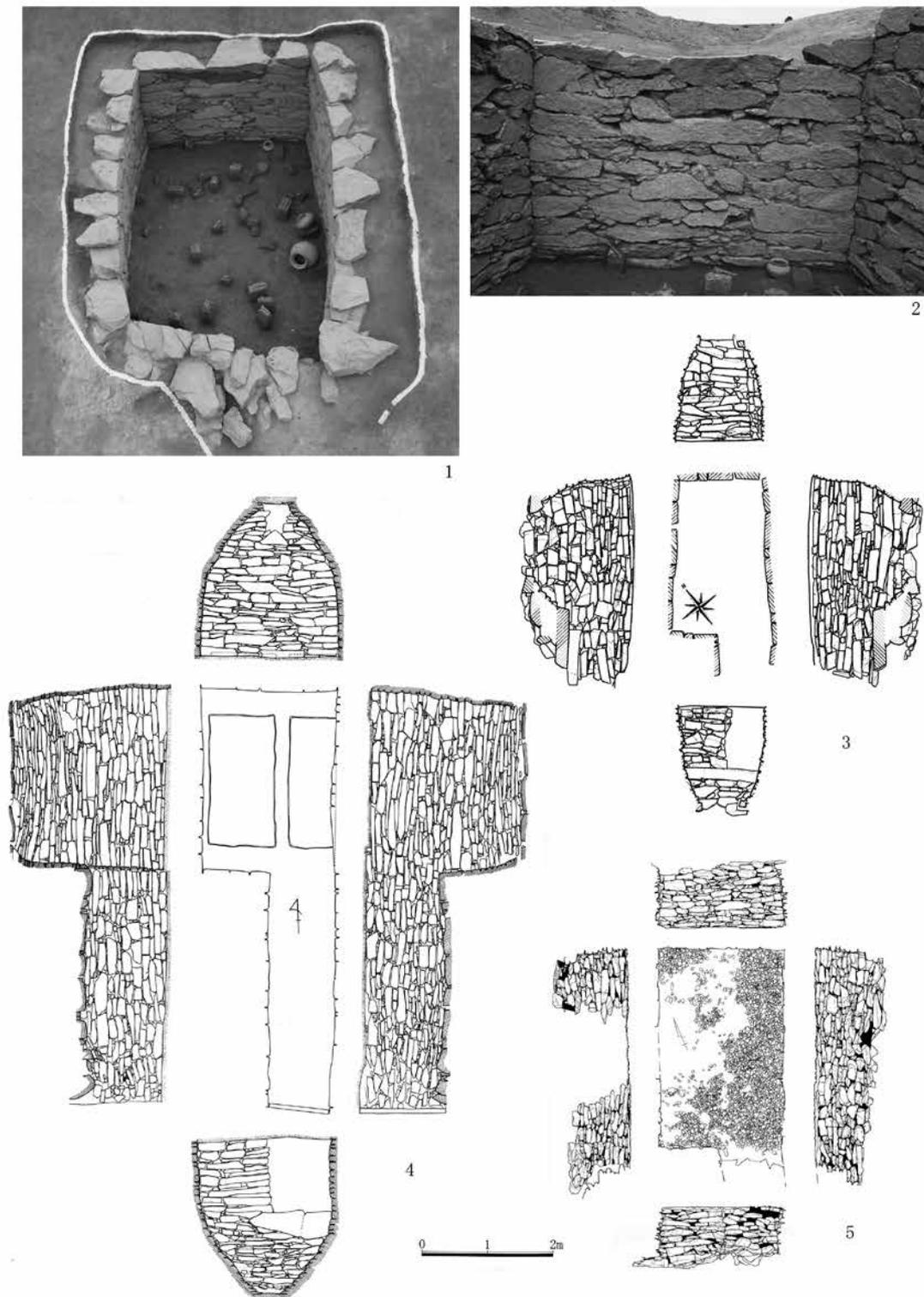


図7 王畿系集団の築造による横穴式石室

(金武重 2011, 高麗文化財研究院 2012, 啓明大学校博物館 1985, 柏原市教育委員会 1996)  
1・2: 城南板橋洞1号墳 3: 漣川江内里7号墳 4: 高霊古衛洞古墳 5: 大阪府高井田山古墳

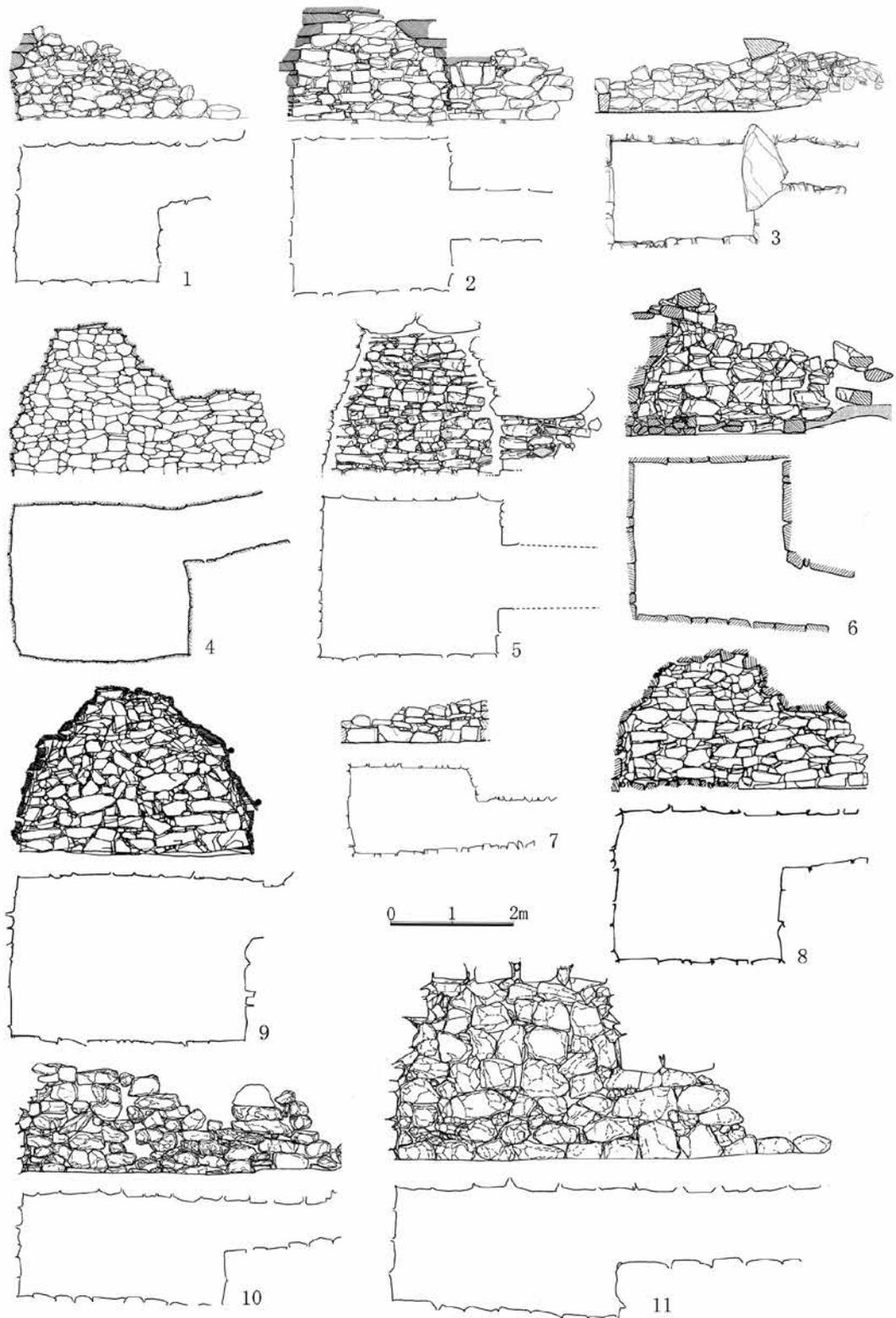


図8 非王畿系集団の石材構築法と床面プラン (各報告書を編集)

- 1: 公州熊津洞 96-1号墳 2: 保寧鳴川洞 95-1号墳 3: 舒川楸洞里 A-27号墳 4: 益山笠店里 1号墳,  
5: 羅州松堤里古墳 6: 陝川苧浦里 E-14号墳 7: 高敞五湖里 3号墳 8: 中原楼岩里 20号墳,  
9: 奈良県桜井宮山塚古墳 10: 奈良県寺口忍海 D-27号墳 11: 同 E-3号墳

見ると、四壁をある程度個別の工程で積んだことを示す縦目地が見られるが、完全な独立壁ではなく、隣り合う壁の石材が互いに噛み合う部分が見られる。報告書では失われた天井部はじめ上部構造について、四壁を途中からすべて持ち送って内傾させるドーム状の天井を想定しているが、東壁の内傾が当初の姿であるのか土圧によるものなのかは判断が難しい。熊津期の長方形玄室を持つ石室に通有の前壁・奥壁のみを持ち送った準穹窿式天井の石室であったことも想定しておくべきであろう。天井石は3枚ほど架構されていたことが想定されているが、複数枚であったならば正確な(準)穹窿式ではないことになる。報告書では高井田山古墳の横穴式石室の起源として宋山里古墳群の石室を比較対象としており、百済地域の直接の影響を述べている。高井田山古墳が王畿系集団の手によるものとは断定できないが、同系の造墓技術が介在していた可能性は高い。今後、大阪府一須賀古墳群の石室など、日本列島内の類似した横穴式石室とも併せて検討が必要である。

以上のように、王畿系集団は公州地域だけでなく地域を越えた造墓活動に従事していた可能性があるが、一方で百済地域の同時期の横穴式石室がすべて同集団の手によって造られたわけではない。冒頭でも述べたように、当該時期の百済地域には宋山里古墳群の石室に近いプランや構造を持つ石室があり、一定の分布の広がりを持っている。さらに新羅や加耶の地域にも同様の形態の石室があり、それらを百済熊津期の石室の影響の下に成立したとみることもあるが、石材使用や築造技術の上からは築造主体が異なっていたとみるべきである(図8)。公州地域内でも、熊津洞古墳群などでは王畿系集団とは差がある塊石を用いた乱石積の石室を築造しており、技術系譜に差が見られる。新羅や日本列島との別の系統的つながりがあった可能性は今後検討する必要があるが、同じ公州地域でも技術系統が異なる石室が並存していた点は興味深い。後述するように、柴山江流域の百済系石室の築造には、むしろこれら傍系の技術が関与していた可能性がある。

## ③……………地域間交渉の視点からみた横穴式石室の系譜

### 1. 湖南地方の横穴式石室構築技法

以上の百済熊津期の中央組織「王畿系集団」に採用された石室築造技術を前提に展望すると、結論として上のすべての技術的特徴を備えた石室は湖南地方、特に柴山江流域では見つかっていない。柴山江流域の横穴式石室については、玄室の平面形や玄門構造の種類によって熊津期石室との関連が指摘されてきたが、より詳細な技術的属性を見ると熊津百済の中心勢力の石室に関連する要素はほとんどなく、その直接的影響で築造されたような古墳は存在しないといわざるを得ない。つまり、造墓工人の派遣を物語るような要素は見られず、この地域の集団が百済王権とは一定の距離を保っていたことをうかがわせる。これは、次段階にあたる泗沘期に、工人集団の派遣を端的に示すような事例が現れることとは対照的な状況である[山本2007]。以下、従来より熊津百済との関連が指摘されていた羅州松堤里古墳、靈光鶴丁里古墳群、そして両地域の間にあたる高敞の五湖里3号墳・鳳德里1号墳について詳述する。

羅州松堤里古墳は使用石材の種類、方形の玄室、石室壁面の漆喰塗布などから百済地域との関係がうかがえるとされる古墳である(図9-1)。特に、独立した墳丘盛土内に埋葬施設を築造する柴山

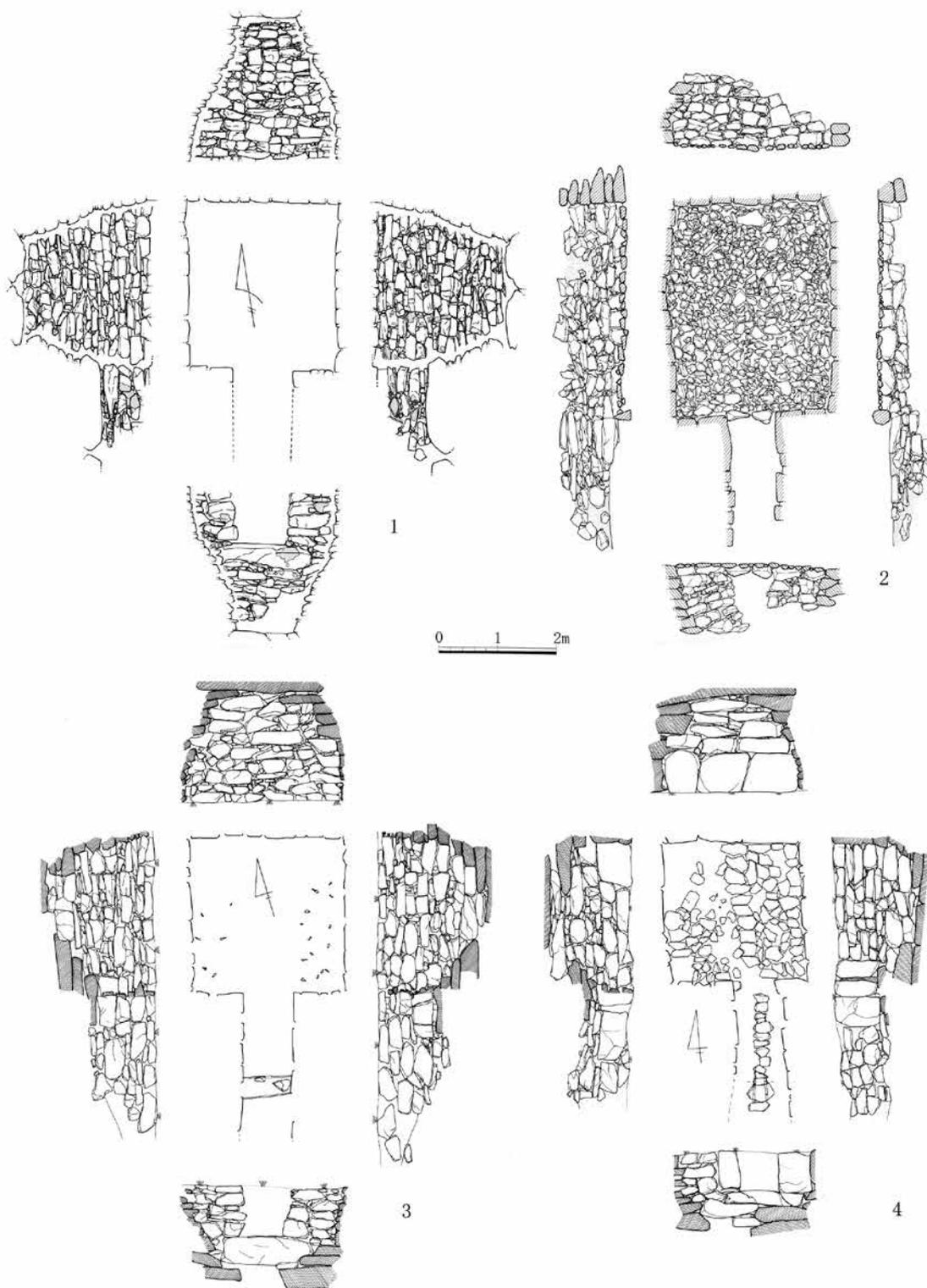


図9 梁山江流域と中西部海岸地域の横穴式石室

(木浦大学校博物館・羅州市 2000, 崔盛洛・金建洙 2000, 李南奭・李勳 1996)

1: 羅州松堤里古墳 2: 靈光鶴丁里デアクション3号墳 3: 保寧鳴川洞95-1号墳 4: 同95-2号墳

江流域の墓制の中において、丘陵斜面を利用して石室を構築している点、そして壁面に漆喰を塗る点は異質であり、百済的と判断される要素である。一方、羨道が前壁の中央に敷設されている点は磚築墳出現以降を除けば熊津期の百済中央にはあまり見られない要素であり、玄室の天井構造も厳密には穹窿式とはいえない直線的な内傾で、天井石を2枚使用している点も異質である。さらに、丘陵の傾斜面に比較的深い墓壙を掘り半地下式に石室を設置する百済の横穴式石室に対し、松堤里古墳の石室は地上式とされている〔木浦大学校博物館・羅州市2000〕。石材使用法を見ると、漆喰を塗るために面を揃える作業は十分に意識されているが、比較的大型の石材を多用している。壁面の構築法を見ると、四壁は最下段において独立的に構築しているようにも見えるが、実際には隣り合う壁面の石材を噛み合わせていることがわかる。楣石の上部で隅丸になる部分があるが、前壁の左右でその高さが異なるなど、明確な作業変換点と判断できるような部分は見られない。そもそも羨道が中央に敷設されている時点で玄室壁面と羨道壁面の構築は分離しており、作業工程において宋山里の石室とは大きな差が見られる。玄門の袖部分に比較的大型の石材を積んでいる点も、王畿系集団の技法からみると異質である。以上のような観点から、百済中央の石室構築技術とはかなり大きな差が見られるといえる。

霊光鶴丁里古墳群は、出土遺物などからも百済との関係がうかがえるとされる古墳である(図9-2)。天井部はすべて崩落しており、完全な構造がわかる古墳はないが、最も残りの良いデジョン3号墳の石室を見ると、やや長軸が長い方形の玄室に両袖式の羨道が付く。壁面は松堤里古墳のものよりさらに不揃いな石材を乱積みしており、最下段以外には構築工程が明確にわかる部位はないが、四隅の状況からみて、各壁は独立した構造ではない。漆喰の痕跡は明瞭でないが、壁面は粗雑ながらも内面を揃えている。羨道に玄室よりも長大な石材を用いている点からも、玄室と羨道は分離した構築単位であったことがわかる。やはり王畿系集団の技術は介在していないとみられる。

地理的に百済地域と梁山江流域の中間地点にあたる高敞では、様々なタイプの石室が築造された。高敞鳳德里1号墳は大型の墳丘に甕棺、石槨などとともに5基の石室が設置された特異な墳墓である〔図10-1~4〕。この点、葬墓制としてすでに百済とは異なる。石室の形態・構造は、詳細が不明な2号石室を除く残りの4基がすべて異なっている。このうち4号石室は堅穴式石室で、内部から中国産の青磁、日本列島の須恵器、百済系の金銅製飾履が出土しており、様々な地域と交渉していた被葬者像を想起させる。石室は5号、4号、1・3号、2号の順で築造されたと推定されているが、個々の属性からみて当地域ないし当古墳のなかで順次連続的に変遷したとは考えられず、それぞれの構築において外部との関係があったことをうかがわせる。1号・5号石室は平面矩形の両袖式で形態的に共通するようであるが、石材の加工や積み方には差がある。5号石室は傾斜を持つ羨道部や玄室四隅を完全に丸く構築する点から、百済中央の技術の介在は全く見られない。1号石室は形態・構造的に霊光鶴丁里デジョン3号墳に類似する。4号石室は石材構築は緻密な方で、大小の割石を取り混ぜ、間隙に小礫を詰めている。他の堅穴式石槨とは異なり、石室と呼べる規模を持っており、百済でしばしば見られる堅穴式(横口付?)石室との関係を検討する必要がある。最も特異な形態・構造を持つのが3号石室である。やや横に長い方形玄室の前壁中央に羨道が取り付く両袖式であり、玄門の下段には楣石を敷設する。石材は比較的良好な形を整えた塊石で、壁の内面を平滑にすることがかなり意識されている。壁面は下段しか残っておらず全体の構造は不明であるが、四

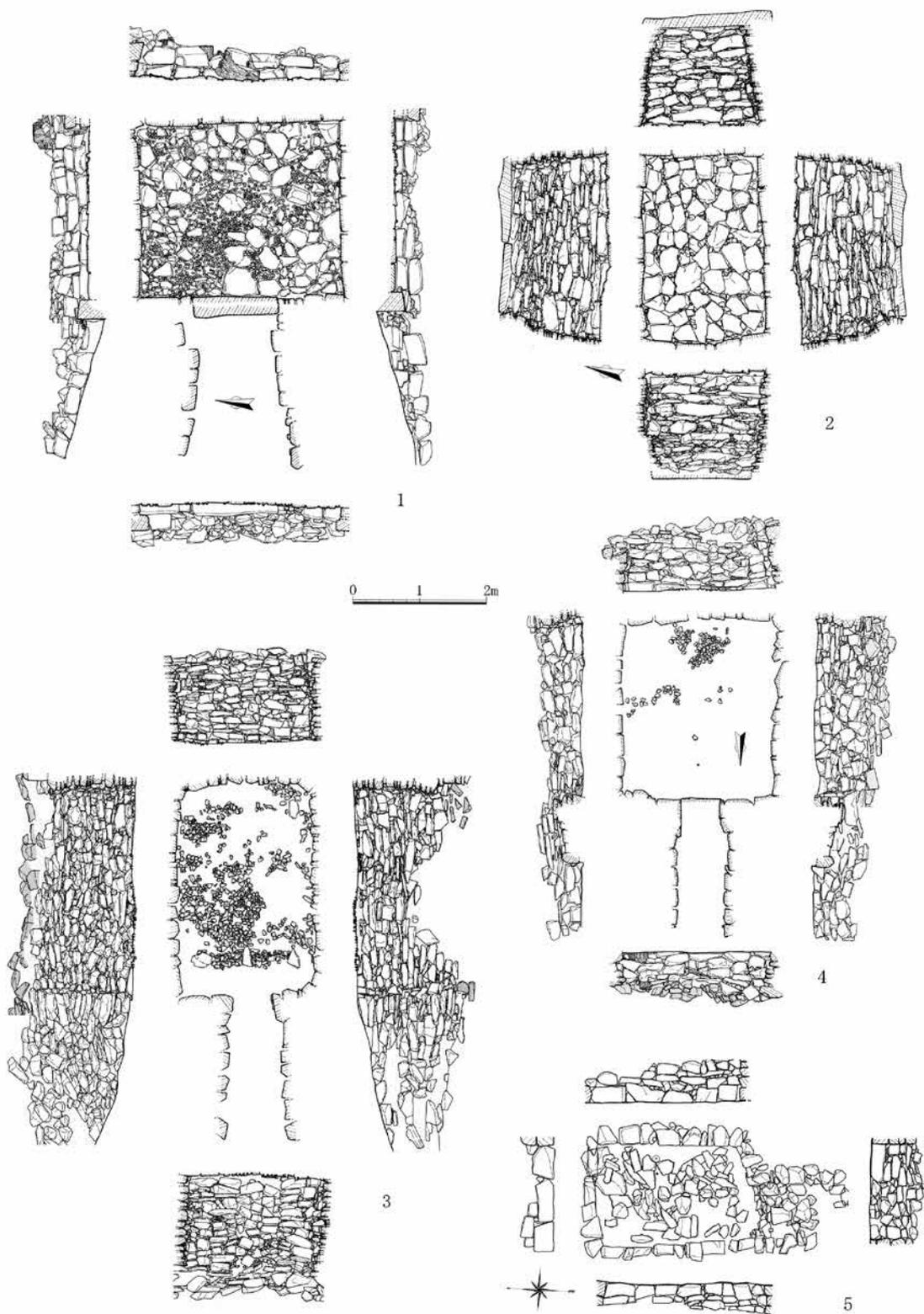


図10 高敞地域の横穴式石室 (馬韓・百済文化研究所 2012, 안효성 2009)

1: 鳳德里1号墳3号石室 2: 同4号石室 3: 同5号石室 4: 同1号石室 5: 五湖里3号墳

隅は比較的角をしっかりと作っており、他の石室とは技術系統が全く異なるといえる。年代の精査が必要かと思われるが、いずれも百済中央の石室の構造や技術とは差があり、その築造に百済王権が関与したとは考えられない。

高敞五湖里3号墳は中国の官印である「○義將軍之印」の銅印が出土した古墳で、上述の多葬墳丘墓とは大きく異なる。出土した土器は熊津期よりもやや時期が下る可能性があるが、石室の構造や構築法は熊津期の系統とみてよい。石室上部はやはり削平されて残っておらず天井の架構法は不明であるが、下部構造からおおよその築造法がわかる(図10-5)。玄室は長方形で右片袖式の羨道が付く。最下段にやや大きめの石材を置いて玄室の輪郭を先に設定し、その上部からは割石を積み重ねており、明確な作業変換点を見ることができる。漆喰の塗布は不明であるが、割石の側面を加工して明確に壁面が平滑になる積み方を意図していることがうかがえる。玄室プランを設定した後は玄室西壁と羨道西壁を一体的に構築する方法をとっている。玄室前壁に使用する石材は他の石材と同等の大きさである。残存状態が悪く四隅と天井の構造がよくわからないのは残念であるが、半地下式の構造であることを含め、この時期の湖南地方の石室のなかでは百済中央の構築法を最も良く反映しているものといえる。ただし、石材加工や築造工程などの細部は王畿系集団の作業とはやや差が見られるため、中央から工人が派遣されたか否かは即断できない。

## 2. 栄山江流域初期横穴式石室の系譜

前述のように、従来栄山江流域の初期横穴式石室の系譜を考える際に、一つの候補として百済との関係が論じられてきた。時期的な並行関係や石室玄室の平面形、玄門構造の類似などがその主要な根拠であったといえる。しかし上に挙げた構築技術的観点から見ると、熊津百済の中央で王畿系集団の手によって築造されていた石室と栄山江流域の石室の間には、直接的な関連性は低いといわざるを得ない。ただし、百済との関係を中央(百済王権)との関係のみから解釈する必要はなく、百済圏内の他地域・他集団との関係を論じる余地は残されている。先に触れたように、例として漢城期の各地に築造された横穴式石室は、地域ごとと集団ごとに形態や築造技術面において多様であり、横穴系であるという点を除いて造墓主体が共通するとはいえない。筆者は、この現象の理由を百済地方勢力の半独立性に求める考えを持っているが、同様のことが熊津期並行の栄山江流域にもいえるのではないかと考える。

百済地域内で栄山江流域の初期石室と共通する技術的特徴を持つ石室墳を探すと、漢城期の古墳にもいくつか構造的に類似する事例が見られるが、時期的により近接していると思われる保寧鳴川洞古墳群や保寧里古墳群、舒川楸洞里古墳群など、忠清南道西海岸地方の古墳が挙げられる。遺物が少ないため具体的な年代を提示するのは難しいが、おおよそ熊津期に該当すると考えられる鳴川洞古墳群の横穴式石室は、方形玄室の前壁中央に羨道が付く両袖式の石室で、壁面には漆喰を塗っており、石材の加工や構築も栄山江流域の初期石室(いわゆる熊津系類型)と共通している。

鳴川洞95-1号墳の例を見ると、玄室平面が正方形に近い両袖式石室で、床面のプランを決定する玄室の基底部の石積みは隅部が直角に近く、隅丸にはなっていない(図9-3)。ただし、壁面を構築する際には四壁は独立しておらず、隅部の石材は隣り合う壁と噛み合っている。王畿系集団の構築法との大きな差である。壁面は高さ1mを超えるあたりまでは垂直で、その上部から四壁を持ち

送って天井部を狭めているが、完全なドーム状（穹窿式）にはなっておらず、天井石には大型石材2枚を使用している。天井を円形に積んでいって極限まで狭め、高くなった頂点に1枚の石材で蓋をする形式の宋山里古墳群の石室とはやはり大きく異なる。使用石材は扁平な割石ではなく塊石が主で、自然石を取り混ぜて比較的雑然と積んでいる点など、榮山江流域のいわゆる百済系石室と非常によく似ている。

さらに多くの地域の事例を検討する必要があるが、これらの点から榮山江流域の百済系として分類されている石室は、百済の中央（王権）と直接関連するものとみるよりは、百済の特定地方勢力とのつながりをより強く想起させるものであるといえる。地方勢力とつながっていた上で百済王権とも間接的に交渉していたのか、あるいはさほど関係を持たなかったのかについては検討を要するが、榮山江流域の各地域を個別に分析する視点が必要である。

## 結論と展望

百済と湖南地方との関係は、様々な考古資料から検討されている。本稿では古墳の横穴式石室を素材に両地域の交渉を検討することを試みた。従来より榮山江流域の横穴式石室には百済系のものがあることが指摘されていたが、本稿では形態・構造に加え構築技術の側面から系統関係を跡付ける作業を行った。その結果、湖南地方に横穴式石室が出現する時期（百済の熊津期）に、百済の都であった公州を中心に支配者階層の古墳を築造していた工人集団が存在したことを試論的に提示することができた。その活動範囲は公州とその周辺地域まで及ぶが、現在までのところ榮山江流域までこの集団が派遣されていたことを想定し得る古墳はない。泗泚期の石室構築技術が榮山江流域まで浸透した状況とは対照的である。おそらくこの時期には、湖南地方の在地首長らの死に際して百済王権から造墓集団が派遣されるような関係が両地域の間になかったのであろう。

ただし王権の介在を問わないのであれば、横穴式石室の構造からみると忠清道西海岸地域の集団が百済地域と榮山江流域の関係を物語る要素となる。西海岸地域の横穴式石室には百済中央の王畿系集団の横穴式石室にはない両袖式の石室があり、構造・形態のみならず使用石材や構築法などに至るまで榮山江流域の石室と共通する点が多い。王畿系集団とは別の系統の石室工人が韓半島中部西海岸地域から南の湖南地方にかけて活動していたことも想定される。

百済地域と湖南地方の中継地的役割を果たしていたと思われる地域として、今後注目したいのが全羅北道の高敞地域である。高敞は、墓制からみると墳丘墓・甕棺墓などの在地発展型のものに基づ盤となっている一方で、竪穴式石槨や横穴式石室など外来系の石築埋葬施設を早くから取り入れ、さらに前方後円形古墳などの倭系古墳やそれに伴う埴輪形土製品など、可視的側面においても他との区別をアピールするような要素を導入している。複数の地域との連携を強調することで独自性を保っていることを感じさせる特徴は、高敞系とも呼ばれる独自の土器様式が存在や、百済系の装身具、中国産陶磁器、日本列島の須恵器などが混在している点にも表れている。少なくとも熊津期に並行する段階までは一つの自立した集団と考えられ、百済と榮山江流域との関係を展望する上で重要な位置を占めると評価できる。地理的に陸路・海路の両ルートを管掌し百済の中核地域と榮山江流域を結ぶ位置にある高敞は、熊津期まで両者の中継的役割を担ったことが想像される。この高敞

地域に様々な型式の横穴式石室が導入されたのも、出土遺物に見られる多地域間交渉を裏付けるもう一つの傍証といえよう。

湖南地方の横穴式石室の展開は形態的にも技術的にも一律ではなく、様々な系統のものがある。その一部は百済系とされていたが、それは百済の中央勢力（王権）との関係として考えるよりは、おそらくその周辺勢力との関係として捉えた方がよく、漢城期以来熊津期に至るまで比較的独立した勢力を保っていた地域同士のつながりであった可能性が高い。6世紀中葉まで百済王権が各地方勢力に対して直接支配を完遂していなかったことを示す要素として、本稿で扱った横穴式石室の構築技術も一つの傍証となるであろう。

## 註

(1)——ただし、異なる被葬者集団が同一の造墓集団に石室の築造を依頼した可能性を想定するならば、同じ技術系譜を持つ石室の被葬者同士を同系とすることはできなくなる。

(2)——本稿では、玄室側から開口方向を見て羨道が左に寄って敷設されているものを「左片袖式」とする。

(3)——羨道の敷設位置に関しては、「右片袖（本稿での左片袖）の思想」として、日本列島の畿内型石室につながる羨道の位置の共通性を中国南朝・百済・畿内の流れの中で理解する見方があり興味深い〔河野 2012〕。ただし、百済地域に左片袖式の石室が多いのは事実であるが、右片袖式のものも少なからず見られ、漢城期の古墳群の中には左右片袖式・両袖式の石室が一つの墓域の中に混在する場合もあるため、特別に限定された思想の伝播として捉えるのは難しい。また、「宋山里型石室の系譜を高句麗には求められない」〔河野 2012, p.562〕としているが、後述のように築造技術の面からは百済と高句麗の石室に共通する部分があり、高句麗からの技術移入の可能性も考えておくべきである。

(4)——壁面に縦横に渡された棒状ないし板状の木製架構物や、天井部の崩落を防ぐための支え棒などが石室完成まであったことが想定される。

(5)——燕岐松院里 KM016 号墳で確認された封土上の溝は、天井石を運搬して玄室上部に載せるための搬入路ではないかと思われる。

(6)——扁平な割石積みの石室に比べ、ブロック状の塊石を用いた石室の方が残存状態が良くないのは、使用石材の形状の問題であろう。

(7)——例えば内部体積 25m<sup>3</sup> の石室を構築するために、墓室の内側に向く面の面積が平均 750cm<sup>2</sup> の石材が約 1200 個必要になる、といった具合である。

(8)——ただし、石材使用指数は一石室の構築においてほぼ同大の石材のみを使用している場合に限り適用できる概念である。大型の腰石や鏡石を使用したり、大小取り混ぜた石材で構築された石室の場合はあまり意味をなさない。

(9)——古衙洞古墳の背後にある大加耶の主山城の石積み古衙洞古墳の壁面構築に類似することを指摘する見解もある〔大東文化財研究院 2014〕。これを同一工人による築造とするならば、単純に造墓集団の提供にとどまらない複雑な状況を想定する必要がある。ただし、壁面を外面に露出させる城壁と内部空間の設定を前提とした石室では構築にかかる技法は全く異なるため、安易に同一技術と判断することはできない。むしろ同種同形の石材が提供されたことに注目し、石材の供給という側面からもアプローチすべきであろう。

(10)——報告書では右片袖式となっているが、本稿では羨道側から見て左側に袖が付くものを左片袖式としている。

## 参考文献

(日本語)

東 潮 1993 「朝鮮三国時代における横穴式石室の出現と展開」『国立歴史民俗博物館研究報告』47

東 潮・田中俊明 1989 『韓国の古代遺跡 2 百済・伽耶篇』中央公論社

柏原市教育委員会 1996 『高井田山古墳』

片岡一忠 2008 『中国官印制度研究』東方書店

- 河野一隆 2012「倭王権から倭国へ—雄略朝の画期の評価を中心として」『講座日本の考古学8 古墳時代 下』青木書店
- 金洛中 2006「柴山江流域の初期横穴式石室墓について」『第18回東アジア古代史・考古学研究交流会予稿集』東アジア考古学会
- 久米雅雄 2004『日本印章史の研究』雄山閣
- 辰巳和弘・森下浩行・吉村公男・辻川哲朗 1993「平群谷古墳群再論（上・下）」『古代文化』45-10・12 古代学協会
- 奈良県立橿原考古学研究所・新庄町教育委員会 1988『寺口忍海古墳群』
- 野守 健・神田惣蔵 1935「忠清南道公州宋山里古墳調査報告」『朝鮮総督府昭和二年度古蹟調査報告』第二冊
- 吉井秀夫 2010『古代朝鮮 墳墓にみる国家形成』京都大学学術出版会
- 柳沢一男 2002「全南地方の柴山江型横穴式石室の系譜と前方後円墳」『前方後円墳と古代日朝関係』同成社（韓国語）
- 啓明大学校博物館 1985『高霊古衙洞壁画古墳実測調査報告』啓明大学校出版部
- 高麗文化財研究院 2012『漣川 江内里遺蹟』
- 国立公州博物館・公州市 2012『宋山里古墳群 基礎資料集』
- 群山大学校博物館 2004『群山 山月里遺蹟』群山大学校博物館・群山市・文化財庁
- 吉井秀夫 1992『熊津・泗沘時代 百済 横穴式石室の 基礎研究』（慶北大学校大学院 碩士学位論文）
- 金洛中 2008「柴山江流域 初期横穴式石室の 登場과 意味」『湖南考古学報』29 湖南考古学会
- 金洛中 2009『柴山江流域 古墳 研究』学研文化社
- 金洛中 2012「韓半島 南部와 日本列島에서 横穴式石室墓의 受容様相과 背景」『韓国考古学報』85 韓国考古学会
- 金武重 2016「中部地方 横穴式石室墓의 構造와 埋葬方法」『韓日の 古墳』日韓交渉の考古学—古墳時代—研究会
- 大東文化財研究院 2014『高霊 主山城Ⅰ（推定南門址／周辺城壁）』
- 柳基正・梁美玉 2002『公州 金鶴洞古墳群』忠清埋蔵文化財研究院
- 柳昌善ほか 2008『舒川 楸洞里遺蹟Ⅰ地域（Ⅲ地域）』忠清文化財研究院
- 馬韓・百済文化研究所 2012『高敞 鳳德里1号墳』馬韓・百済文化研究所・高敞郡
- 木浦大学校博物館・羅州市 2000『紫微山城』
- 文化財研究所 1989『益山 笠店里古墳 発掘調査報告書』
- 朴大淳 2008『保寧 鳴川洞・花山洞 오야골遺蹟』忠清文化財研究院
- 朴淳發 2000「4～6世紀 柴山江流域의 動向」『百済史上의 戦争』書景文化社
- 山本孝文 2002「百済 泗沘期 石室의 階層性과 政治制度」『韓国考古学報』47 韓国考古学会
- 山本孝文 2007「百済 泗沘期 石室의 設計와 構造系統論」『韓国考古学報』63 韓国考古学会
- 신홍남 2014「柴山江流域 百済～高麗時代 石室墓 研究」『韓国上古史学報』83 韓国上古史学会
- 安承周 1981「公州熊津洞古墳群発掘調査報告書」『百済文化』14 公州師範大学百済文化研究所
- 安承周・李南奭 1993『公州 新基洞・金鶴洞 百済・高麗古墳群 発掘調査報告書』百済文化開発研究院・公州大学校博物館
- 안효성 2009『高敞 石橋里・五湖里遺蹟』全北文化財研究院・高敞郡
- 李南奭・李賢淑 1997『公州 熊津洞古墳—1996年度発掘調査—』百済文化開発研究院・公州大学校博物館
- 李南奭・李 勳 1996『保寧 鳴川洞古墳—1995年度発掘調査—』百済文化開發研究院・公州大学校博物館
- 李文炯 2014「漢城期 百済 横穴式石室墓 現況과 特徵」『漢江流域 横穴式石室墓의 性格 検討』韓國古代学会
- 李榮文 1991「全南地方 横穴式石室墳에 대한 一考察」『郷土文化』11 郷土文化開發協議会
- 李正鎬 1999「柴山江流域의 古墳 變遷過程과 그 背景」『柴山江流域의 古代社会』学研文化社
- 李賢淑 2013「漢城期 百済의 地域相」『百済, 馬韓과 하나되다』漢城百済博物館
- 李弘鍾ほか 2010『行政中心複合都市敷地内 1-1 区域 燕岐 松潭里・松院里遺蹟』韓國考古環境研究所・韓國土地住宅公社
- 林永珍 1990「柴山江流域 石室墳의 受容過程」『全南文化財』3 全羅南道
- 林永珍 1997「全南地域 石室封土墳의 百済系統論 再考」『湖南考古学報』6 湖南考古学会
- 曹根佑 1996「全南地方의 石室墳 研究」『韓国上古史学報』21 韓国上古史学会
- 曹根佑 2007「羅州 伏岩里古墳의 石室墳 導入 背景과 性格」『柴山江流域 古代文化의 成立과 發展』国立羅州文化財研究所

- 
- 曹永鉉 1990『三国時代 横穴式石室墳의 系譜와 編年研究』(忠南大学校大学院 碩士學位論文)  
崔盛洛 2009「梁山江流域 古墳研究의 檢討 —古墳의 概念, 築造方法, 變遷을 中心으로—」『湖南考古學報』33 湖南考古学会  
崔盛洛・金建洙 2000『靈光 鶴丁里・咸平 龍山里遺蹟』木浦大学校博物館・益山地方国土管理庁  
崔完奎 1997「全北地方 百濟 横穴式石室墳」『湖南考古學報』6 湖南考古学会

(日本大学文理学部, 国立歴史民俗博物館共同研究員)

(2018年5月24日受付, 2018年10月1日審査終了)

---

## Baekje and Honam Seen from the Perspective of Construction Techniques of Corridor-Type Stone Chambers: Tomb Groups of the Ungjin Period Baekje and Yeongsan River Basin

YAMAMOTO Takafumi

This paper takes, as material, the *yokoana-shiki* sekishitsu or corridor-type stone chambers and presents one aspect of the relationship between various groups of Baekje and Honam region (Jeolla province centered on the Yeongsan river basin) during the Three-Kingdom Period of the Korean Peninsula. Specifically, the aim was to infer trends in the inheritance of tomb methods and worker trends based on the similarities and differences (in the inheritance of techniques) observed in the construction techniques of the corridor-type stone chambers in both regions. The tombs of the Honam region from the late 5<sup>th</sup> to the early 6<sup>th</sup> century showed diverse aspects, with various burial facilities built including kamekan (earthenware jar-coffins or burial urns), pit-type sekkaku (stone surrounding wooden coffins), and corridor-type stone chambers. These were in burial mounds of various shapes including trapezoidal, circular, and large key-hole shaped forms. This was a transitional period between the development of the burial system (*shukobo* or burial mound surrounded by a moat) of the Mahan confederacy and the proliferation of the standardized corridor-type stone chambers of the Shihi period Baekje. One can observe that the cultural influences of the various regions spread to this area at a time when the indigenous tomb system was changing to the Baekje system of burial. One of the burial systems in this period includes the corridor-type stone chambers considered to have been influenced by Baekje. If we analyze the construction techniques of the corridor-type stone chambers thought to be related to the central power of the Baekje region during this period, one can see a correlation between the methods of stone processing, usage, the process of construction, space setting, and the frequency of use of the stone materials, from among the different kofun groups. It is, therefore, possible to ascertain the construction techniques as well as the genealogy of the groups that maintained them. Assuming that the tomb construction group that possessed these conventional techniques is the “Kingdom Group,” it is possible to estimate the range of their activities from the distribution of the stone chambers constructed using similar techniques. If we compare the corridor-type stone chambers built using techniques of the Kingdom Group and the stone chambers of the Honam region, no direct relation is observed in the construction techniques and the methods of using stone materials, although the shape and rough structure are familiar. Therefore, the corridor-type stone chambers of the Honam region assumed to be of the [Baekje system] [Ungjin system] cannot be

said to be constructed in relation to the central power of Baekje. On the other hand, in the west coast region of Baekje, stone chambers similar to those in the Honam region regarding construction and techniques are present. As a result, there is a possibility for a relationship with a particular regional group of Baekje.

Key words: Honam region, corridor-type stone chambers, space setting, kingdom tomb group, indices of usage of stone materials